昭和三十一年八月
第三号

窯業同窓會會誌

東京工業大学
窯業同窓会

第三号発行に当つて……　会長　大野　政吉
思い出のひとこま……　熊沢治郎吉
熊沢、井深両先輩を訪ねて……　藤岡　幸二
御礼の言葉と追想記……　高井　三郎
此の道五十年……　永塚　楽治
近藤博士を偲ぶ……　黒田　泰造
思い出の記……　小林　作平
五十年の回顧……　亀啓　三郎
同窓の皆様に……　山内　俊吉
◆ワグネル先生の墓参◆熊沢治郎吉先生頌徳像徐幕式◆近藤清治先生の十七回忌参◆第二回卒業五十年会記◆故奥田誠一先生追悼会◆窯業同窓会定時総会と講演会及び懇親会◆会計報告◆役員改選◆事業附金芳名録◆懇親会福引景品寄贈芳名録◆名簿発行に就ての御願い◆学内だより（山内教授欧米視察旅行に出発、新講堂と体育館、正門、学長の選挙、母校の創立七十五周年記念全学祭、窯友会に就て、本年三月卒業生の卒業論文、窯行会に就て、窯業助手懇談会）

会誌第三号発行に当つて

会長　大野　政吉

窯業同窓会も四月の総会が百数十名の会員の出席を得て盛大に行われました。このように年々盛んになってはおりますがこれも会員諸兄の御協力の賜と有難く御礼申し上げます。総会席上では私が再三会長に選ばれまして御引受することになりました。何卒よろしく御願申し上げます。

同窓会の総会は毎年東京で開かれますが、これでは地方会員の方には盛会の挨拶もお伝え出来ないので、一昨年からは地方におられる方に副会長をお願い致しておりますが、今度はどこか地方でも総会を催してと考えておりますが御意見、御希望なども御寄せ頂き度く存じます。昨年からは卒業五十年の方に記念の御祝詞をすることになりましてこう云う私も総会で記念品を頂きましたが大変有難く御礼申上げます。

就きましては御礼を申上げますとともにまた今後の方方の為によろしく御願致したいと存じます。窯業を卒業されますと自動的に同窓会員になるのでありますが、これではあまり簡単でありますので来年度からは新会員は総会に是非御出席願いまして、会員の諸兄にも御被露致し度いと考えております。

この会報第三号には熊沢治郎吉氏、井深捨吉氏の消息も伝えられ卒業五十年生の談話や山内教授の欧米通信も掲載されて大分賑やかなものとなりましたが、何卒諸兄におかれても本誌に原稿不足のない様諸事御消息賜り度く存じます。ワグネル先生、近藤清治先生の墓参についても掲載記事を御覧下さいます様、本会の数々の行事等は他の同窓会からも羨まれておりますので本会の将来のため一層の御尽力、御援助を御願申上げます。

思い出のひとこま

熊沢治郎吉

私は明治三十年度に東京高等工業学校窯業科を卒業して歳は二十七才位であつたが、或窯業地方へ赴任せしに其地に郡立陶器学校が出来、初代の校長に任命せられ、第一に生徒募集に骨を折り僅かの生徒を集めて授業を始めたが、ソロソロ窯の築造をも始めんと考へた処が校舎内に高低の地なく、止むを得ず煙突を築き一室窯を築かんと準備中、同町内の有志者が集まりて、学校では煙突により窯を焼く積りなるも、是れにて成功するならば町内を二本の手にて歩行し、足を高く挙げて通行して見せんと申出で、此事を当事者たる拙者に通達せしめんとし、風呂場の設けある所を撰み、小生の其浴場へ来るのを待ち其入浴を待ち、幸に入浴せしにより湯気の貯えたる浴室で右の事実を説明し退場せしに付、学校の実習教員に此事を伝へ、愈々窯を焼く時には松薪を多く投入し焼成を盛んにし、煙突より噴火を盛ならしむる様にし、同時に二ケ所に在りし校門を閉ぢて何人をも出入を禁ずる事とせり。

此方法によりて窯を焼き終り、目下尚其窯に入れて焼き出せる品を保存して居る事、是は其拙者の卒業せし学校の先生の何れも独仏両国を主とし視察せられたる結果、東京の母校にも同様築造されたるのを見て承知し居りし為め、右に試みたる結果なりしはいふ迄もない事であつたのである。

右の話は小生が最初赴任せし岐阜県土岐郡土

岐津町へ参りし時の実話であります。

熊沢先生は明治五年のお生まれであるから今年八十四才かと存じます。最近は眼を病み視界が判明しない所を自筆で書いて送つて下さつたものです。御自愛の上益々御長寿をお祈りします。　編　者

卒業50年以上の方々に贈つた花生（辻晋六作）

熊沢、井深両輩を訪ねて

藤岡幸二

私は過日機会を得て大先輩の熊沢治郎吉氏と井深捨吉氏を各々其お宅に訪問する事が出来て年来の宿願が遂げられた様な朗かな気持になつた。以下少しく其実況を記して同窓諸君にお伝へしよう。

熊沢さんと私の交際は随分古い頃からで私が学窓を出て暫く越中島の工業試験所にお厄介になつた頃から始まり私が京都の松風工業に勤めた四十数年の間も公私いづれの面でも始終御世話になつた経歴を持つて居る。従つて東京に出た時には必らずお訪ねして旧交を温めたのであつたが、戦争となりやがて熊沢さんも公職を辞められ終戦となつて郷里に引籠られてからは会ふ機会もなく、年賀の交換位でお互の無事を知る程度であり、一度会つて昔語りがしたいとの希望を久しくいだいて居つた。井深さんとは熊沢さんほど親しくはなかつたがそれでも多治見の学校、試験場に居られた関係上陶磁器関係は京都との結びつきも多く時々お目にかかつて深い親しみを感じて居り、機会あらば御引退後の動静を伺いたいと思つて居つた。ところが遂に其機会が来たのである。

私は昨年秋頃から東京で小さな仕事に関係する事になつて月々東海道を往復する様になつた。丁度去る五月十六日東上の途中名古屋に用を足す事になつて下車、其日は元私の関係して居た松風陶器工場を訪問して同窓の榎本君、安田君にお会いして其日は同社々長の処で厄介になり翌十七日朝の汽車で多治見に向つて、市ノ倉の加藤昇君を尋ねた。昇君は昇峯窯を独力で経営して居る満洲引揚の努力家で私とは京都、満洲と古い関係を持ち多治見の陶器学校で熊沢、井深両校長にお世話になつた男だが、今度は仕事の都合で同行が出来なかつたので土岐津の小島鯛三君に案内をしてもらう事にした。小島君は初期の陶器学校の卒業生で熊沢、井深両氏の下に深い関係を持ち陶磁器方面での古猛者で、ことに白川陶器で硬質陶器の皿を製つてから其方面のベテランで現在土岐津高山で小島製陶所を経営硬質陶器の皿を専門に焼出して居られ、私とは古く京都松風工場に働いた事もあつて其頃からの親しい仲であり喜んで両先輩への案内を引うけてくれた。

十七日の午後三時過小島君と井深氏のお宅を尋ねた。多治見の陶器学校の側の高台にある閑静な処で予ねて電話して置いたのですぐ請せられて座敷に通つた。井深氏は数へ年の八十二才だとの事だが見た処仲々のお元気で話は古い懐古談に始まつた。丁度蔵前卒業五十年以上の方々に同窓会から贈つた記念の花瓶が一週間ほど前に着いた処だと、其花瓶を持出されて作者辻晋六君の事から工芸美術などの話になつて近頃の絵画の事、生花の事など議論はつきぬ。また井深氏は美濃の生れで蔵前卒業後は二三年中途で製鉄所かに関係された丈で、あとは全く美濃陶業の為に学校試験場と郷土の多治見に後進の育成と斯業の指導に過された特志家の事とて引退後卒業生や関係有志者に依つて陶像がつくられ、校庭に温容を表はした胸像が建立されて居るとの事である。学校経営の苦心談や予算分捕りに知事との折衝談或は試験場の試験結果実績など話は何時尽くるとも知れなかつたが、余り長座してもと一時間余の会談で切あげ健康で寿齢の永からん事をお祈してお宅を辞した。広いお庭には大工が家の修理に忙しく働いて居り、老先輩や老夫人もまた其庭に下りて見送られるのを名残を惜しみつつ坂を降りた。

十八日私は市ノ倉から小島君は土岐津駅から共に国鉄の客となつて中津駅に降りた。中津川は昔の中仙道の要所で小説や実禄でなつかしい所、少し街を歩いて見る。街の中を奇麗な川が流れ残された古い建築も眼について奥ゆかしい感じの静かな街である。川の中洲に黄、紫など(菖蒲科)の花の咲いたいかにも農村らしい道を爪先あがりに川に沿つて約十分位の処に熊沢老先輩の家がある。一時と申上げて置いた約束時間より少し早くお伺したが先輩は待つて居つたとばかり玄関に迎へて下すつた。奥の座敷に通つて一通りの

挨拶を交した、勿論廿年振り位であろうか、お互に顔を見合せて涙のあふれるのを禁じ得なかつた。お座敷は庭に面した静かな六畳間、庭はまことに広く中央を小川が流れて居り小築山もあつて自然の景色をとり入れた庭で手入もよく行き届いて居る。末娘と其御主人が一緒に住んで居られて老先輩の御世話もして居られるとの事、熊沢さんは明治五年生れの満八十四才とのことだが昔に変らぬお元気でトテモ其歳には見へない。ただ眼が悪くて困るとの事でしたが白内症(そこひ)で細いものは見へないらしく可なり不自由との事でした。然し見た処昔ながらの温容でニコニコと昔話しをつづけました。

幼年時代の生立ちから中学時代のいたづら盛りの面白い話に始まつた。先輩は苗木村の産れださうで今も生誕の家が残つて居ると云ふ。この中津川の家は親戚が持つて居る良い土地があつたので古い家を買つて建てたのだとのこと、老後を養うにはこれ以上の家はあるまい。話は外国留学時代の経済的苦難に移り、文部省留学生は其頃資金豊富で妻君同伴の者さえあつたが自分等はトテモ苦く(先輩は当時の農商務省海外練習生だつた)帰路の旅費もくれないのだから大に苦心した。当時丁度高山博士(高山甚太郎博士、東京工業試験所長兼東京高等工業学校窯業科長)が海外視察で英国に来られたので、滞在中は毎日朝からホテルに伺つて用事を手伝ひ又独仏などへも同伴してもらつて大に助かつた事、高山博士が婦人に関心を持たれた内輪話など一寸公表をはばかる程の面白い話もあつた。最近の話では今度駄知に陶器学校を作る事になつたので自分も最後の御奉公に最初の一年間製陶法の講義をして小島君(同行した鯛三君)にも同席して聞いてもらい次の年から小鳥君にやつてもらう事にして居るのだが、家族の者は老齢でありことに眼が悪いから、そんな事をしてはいけないと断念させようとして学校当事者にも断りに行つたりして居るが、自分はあくまで強行する考だととてもの意気込である。先輩夫人がこの春脳溢血で亡くなられた事もあるので、御家族の方々の心慮も無理からぬ事と考へられるが、先輩の最後の陶業界に尽したい熱意のほども捨て難いものがあり小島君等の配慮で適当の解決がありたいものだ。

過日卒業五十年以上の者にと記念品を送つて来たので明けて見たら立派な花瓶、作者は辻晋六とある。よく考へて見たら自分の教へた生徒だわい君！ 辻晋六と云ふ生徒は京都の者でトテモ温和しい生徒で陶芸作家になるなどとは思はなかつたが、君！ えらい者になりよつたね、と感慨無量の面持だつた。そこで私は辻君とは京都で親しく交際をして居り、辻君は一人コツ〳〵と陶器と取組んで陶芸に打込んで居る特志の芸術家で、名利におもねらず、時流にげい合する事もなく本当に蔵前出身者の華だと御話した所非常に喜んで居られた。それから最近多治見陶器学校の出身者や美濃陶業界の有志者が集つて先輩の功績を表彰する企が出来、陶器学校出身の彫刻の大家雨宮氏の製作にかかる等身胸像が試験場の庭前に建てられるとの話にうつり、うれしさうに又いかにもなつかしさうな顔付でした。

話は何時までもつきぬが帰る汽車の時間もあるので三時半頃に切あげて名残をしい別れをつげた。先輩は私達の行くのを待たれたのか洋服を着てネクタイまでゝ外出時の様な服装で送迎して呉れられた。平素家に居られる時はアンナ服装はして居られないだろうと思うと先輩の心使ひのほども察せられて涙がこぼれるのでした。

中津駅から汽車に乗り小島君と色々両老先輩に就て話を交しつゝ土岐津駅で多忙の中を二日にわたり案内してくれた労を謝してわかれ、私は一人多治見に下車市ノ倉の加藤君の家に帰つて両老先輩に末ながく幸あれと祈りつゝ回顧の夢を結ぶことにした。

私の蔵前を出たのは明治卅八年(今年が五十一年目)日露戦争終結の年であつた。正月には旅順陥落祝賀で蔵前校内の艇庫からボートに日章旗を掲げて颯爽と隅田川を向島に漕ぎ上り言問団子や長命寺の桜餅をぱくついた事を覚へて居る。それから捕虜の問題だが松山を始め各地に捕虜収容所が在つたが其待遇たるや極めて寛容で、松山の収容所の将校には故国から妻君を呼びよせる事も許され同棲をさへ黙認されたと薄い記憶に残つて居る。そうして幾年もたたずに本国へ帰国を許された様であつた。又其後の日独戦争の結果日本が勝つて青島に居つた独乙兵が大部隊捕虜として内地に収容されたが、専門技術を持つた者などは直ちに各専門工場に交渉して其工場へ預けられた。私の働いて居つた京都の松風工業も当時独乙の磁器製造所に働いて居つたと言ふ一独乙工員(名を失す)を割当てられて寮に寄宿を許し化学磁器の工場で働かせた。勿論独乙の進歩した化学磁器製造方法を彼から修得しようとの考があつたからであるが一年余り仲よく働いて帰国させた。日露戦争の捕虜も数年足らずで故国に帰されて日本で苦役に使つたと云ふ様な事は余りなかつた様だ。武士は相見たがいとの考があつた様で、捕虜は各自国へ帰されてから其国の裁判にかけられたもので敵国側で今度の様に裁判されたり、終戦後十数年経つても帰国を許されないと云ふ様な事は全くなかつた。此等の事を考へ

ると物質的文明は成程非常に進歩したが果して思想的に本質的な人間の文明と云ふ方面ではどんなものであろうか。道徳だとか人情だとか(こんな事を言ふと今の若い人には笑はれるが)言ふものは無用の長物であるのか、文化とは果してどんなものか表面丈の文化では人間は救はれまい。心の交り心の愛、東洋の古い思想は果して呪はるべきものか。彼是思い合せて感慨無量のものがある。近代青年諸君の深慮を切望する。話は脇途にそれたが、熊沢先輩は明治三十年の卒業だから今年五十九年目、井深先輩は明治三十四年卒業で五十五年目である。尚熊沢先輩より一年前明治二十九年に卒業された渡辺明先輩が健在である事は心強い。渡辺先輩は硝子の専門であつて先年同窓会でお目にかかつた。本年の同窓会にも出席された様だが私は出なかつたので其後はお会しない。何にしても今度の両先輩訪問は長い間の宿願であつて私には生涯の良い思出であつた。両先輩及渡辺先輩が尚健康を確保されて卒業七十年八十年の記念祝賀を迎へられる事を祈つてやまない。

(昭和卅一年五月卅日記)

御礼の言葉と追想記

高井三郎

先般同窓会から卒業五十年祝賀会に御招待下され、及記念品を頂きまして寔に有難く喜ばしく誌上を拝借厚く御礼申し上げます。私は本年卒業五一年になります。この間会社業務で幸い大過もなく、幾分の業績は残して今日に至りましたことは恩師、先輩、同僚、後進者各位の御庇護御援助によるものと感銘、感謝致す次第であります。人生五十は七十に延長された今日、長生とは云えぬかも知らぬが同年輩大多数が故人となり吾々が残されていることからは長生組であるでしょう。それかと言うて徒にローマンス・シルバーに自惚れて得々としていたのでは社会的無用人物になりますから老勇を奮つて、公私に貢献し来るべき卒業百年祝をして頂くことを楽しみに待っています。その節にはどうぞよろしく。

昔話、明治三十五年(一九〇二)母科に入学十名、今生存二名、ヤンチャン組と温順性の二派、前者で窯業科歌を作る。それは「霊光春に輝きて、黒堤雲に匂いあり、朝のとばりのおごそかに、開けばそこにはえありや、中略。末句は名も旭焼たつ光り」小人数の窯業科の気勢を揚げるのと旭焼宣伝をかねたのだが上級生からは僭越視されて喜ばれず同級生だけで騒ぐ。後進又続かず自然霧消、次に二年生の時、日露開戦連勝で翌年卒業期三十八年(一九〇五)に大勝利に終る。今回の敗戦、現在の李ライン、ブルガーニンライン等でいじめられるのは右大勝利が一因でもある。負けるが勝ちであつた方が良かつたかもしれぬ。在校中鉄道馬車が電車に代り電灯は少く紫色のアーク灯が煌々と上野の森に映えたのは今も髣髴として浮ぶ。

演芸、娯楽方面は歌舞伎の団、菊、左時代、新派の高田、藤沢等不如帰、金色夜叉等で大入満員、娘義太夫の綾之助一座にドースル連のファン殺到、相撲は、梅、常陸の全盛期、浅草の玉乗曲芸スリル満喫、蒲田の梅園、団子坂の菊は春秋の散策地、北廓突かずんば死すとも帰らずを高吟する虚勢張組もあり蔵前人は校内艇庫から辷り出し向島草餅で観桜会。「春らんまん」「あゝ玉杯」「青葉繁れる」「敵は幾万」の歌ができる。もりかけ二銭、天ぷら五銭、焼芋百匁二銭、下宿料三食付月七円五十銭也等々思い出はつきぬ。

最後に(窯業原料成分と健康との関連問題)…現今珪肺療養所が出来ている。原料有害の一例であるが有効方面の体験を書く。三十才の頃胸部少恙で咳、微熱あり。N医学士曰く「エーリツヒ博士がソリユーブル・シリカが有効であるがその薬品は出来ぬ、玉子一個に〇、四瓦含む、一日四瓦必要だから十個呑めと、独逸雑誌に書いてある。試みよ」と。依つて創めてみたが忽ち飽きて十個はとれぬ、三食毎に二個ずつ六個をのむ。二、三ヶ月して十二貫の体重が十五貫に殖え、異状解消し、旧倍頑健となりて今日に及ぶ。先年このことを少異のある人に話したが先日久しぶりに面会したら右法を併用して全快したと丸々に太つた身体で厚く礼を云はれた。体質病質によりては平行療法で効果的と思う。別に昔、セメントの薬的臨床実験で学位を得た医師が三人あると聞いた。矢張、珪酸、石灰等の作用だらう。

以上記して参考に供す。

その昔とりしシリカやいま若葉

(三十一年五月記)

此の道五十年

永塚楽治

辺見の貞蔵や、辺迦の仁吉の生地に近い磯部と云ふ一寒村に生れ、任狭ならぬ百姓の四男坊。「俺が国さで見せたいものは御茶に蚕に盆踊り」と云ふが、其あねさん被りの手拭の中をのぞきたい其頃、どうしたはずみか、とある機会に笈を負うて上京した。あたり一面甘藷やかぼちゃより出来ない貧弱町村に生れた。何の風情か窯業科なぞ選ん

だか、自分ながらおかしくもあり酔興でもある。此道五十年と云ふが歳も七十才を越え卒業後五十年会も催さる、今日此頃、生き長らいてるのが不思議な位だ。此道を棄てゝ数年。老人性の病に悩みつつ療養生活にいそしむ其日〳〵が長い様な気がする。五十年と云へば長い様で短い。赤煉瓦に十年、陶磁器に二十五年、あと数年はステアタイトや兵役なぞに日を暮した。唯だ一生を通じて実業教育二十五年は何と云つても自分一生の中心である。子弟教育をしながら、業界への指導誘掖、少い人間で何かと研究指導に尽したと云へば云へる。瀬戸の鋳込を常滑に移し、常滑の頁岩の研究、反転して瀬戸に再任。卒業生への指導等教職員と共に、研究結果を雑誌やパンフレツトに発表し、延いて業者各位が参考の一端ともなつたとすれば之れ幸である。其れにも増して水戸や瀬戸、常滑を通じて何百と云ふ若人を、不束ながら養育し得た喜びは、何に譬へる様もない。今すでに六十を越した中老人が当時の若人かとあさぶむ計りだ。そして此等の若人が業界の先駆者として活躍しつつあるのを眼の当たり見て心より喜びに堪へない。今や郷里に近い利根川の辺りに寓居して病を養へつつ、すきな碁も釣も医師より止められ、バラやダリヤを人任せなるも楽しみの其日の友として口は聞かないでも附き合つて呉れる。「七十のとしを迎へて今さらに思ひ出多きすぎしことかた」は偽わらぬ自分の実感である。

近藤博士を偲ぶ

黒田泰造

天は曇り、風は薫る多摩の霊域に立ちて、親しかつた窯業界の学者に別れて早くも十七年忌を迎へ、故人を偲び感深きものがあつた。

故近藤清治先生

私は明治卅三年三高に近藤、鉛、中沢、喜多の四君と共に入学し奇しくも共に数へ年十八才であつた。此外に数人と仲間を造つて下手なテニスを日々楽んでいた。共々に数回旅もした。三年後日本で初めて大学入学に試験のあつたのが東大工科の応化であり、此五人が同時に入学したのであつた。氏は語学と数学は実に勝れて居られ三高は主席、応化卒業は主席者(銀時計)と平均点で一点の差もないのであつた。そして妙らしくも実に独逸語の卒業論文であつたのだ。滞米中仏語を学ばれ衆より抜んじて賞められたとの事でもある。

専問では米国某大学より学位を取れとの事であつたが忙しくて捨ておかれたが米国窯業協会より名誉会員とせられた。其頃世界で七人の内の一人である。之と云ぅ道楽はなく勉強と野球見るのと煙草位で夜は十二時まで勉強され学校でもよく室に鍵をかけて居られた。三重県は桜村の神童で三高入学の時は…私も先年氏と共に行つた…村に程遠からぬ菰野温泉に氏の先代の建立されたお寺に母君と米を携へて行つて勉強したと、さぞ良い母君であられたらう。

平素内外の指導にかなり疲労の様子であつた。御弟子の原稿もよく目を通され図面を書き直されたりしたと、私になくなる十日程前に夜丈は少し呑気にしたいと書いて来られたりした。奥様が診察を勧められたのに対し一日休むと一層仕事がたまつて苦しいとて行かれなかつたと、そして委員会等で外出されても大低必ず帰りに学校に立寄られる程真面目であつた。又平素怒られず誠に優しく、難なく世の中を感謝されていて不平は云はれず誇らしげに自分の事を云はれた事もない。それで専門以外の方面に余り知られていない。会議の席でも殆んど黙して居られ聞かれなければ充分御存知でも黙つて居られ、人が聞けば詳しく話されるのである。

此国宝を早く失つた事は此国の為に甚惜しい事である。恨みたいのは過労と煙草であらぅ(血圧も高かつた)。御供した旅先でカバンに沢山の竹のパイプがあり、何心なく私は捨てたら、綿が詰めてあるのだよとの事であつた。

終に中村学長の弔文の一節を抜いて掲げさせて頂く。「君天資直亮にして沈毅学徳邵大其公私生活は仰いで以て範とすべし……本邦斯学の至宝と云ふべく普く天下の瞻仰する所となる。東京工業大学窯業学科をして我国唯一の指導の機関たらしめ今日の隆盛を見る…君の学校にまつ…人格高潔にして敢へて功名を求めず、恭倹己を持し温容僚に接し、寛厚子弟に臨む、誰か君の高風を畏敬せざるは無からむ……」

思い出の記

小林作平

窯業の学科を修めたが石灰石の焼き方は教はらなかつた。石灰の産地、岐阜県赤坂町金生山の近くに生れたのではあるが別に意に介することもなく過ぎ去つた。子供の頃には年に数回山に遊んだが、その山こそ石灰の出る山であつた。麓から十数丁の所に虚空蔵尊が祭られている。日本三

大虚空蔵尊の一つと云ふことで地方でも有名であり、参詣者もなかなか多い。途中に展望のよい所がある、濃美の大平野一望の下に眺められ晴れた日は名古屋の天守閣の金の鯱さえ見え中々の良い景色である。

山への登り下りにチン〳〵と云ふ涼しい金属音が聞えた。その音こそ石灰岩に穴(発破の穴)を穿つ音だ。何とも云はれぬ良い音で未だに耳の底に残つている思ひ出の音である、それが今はブル〳〵〳〵と云ふ誠に無粋な音に変つた。然し採掘方法の進歩が斯くあらしめたと思えば諦めもつく。

子供の頃の石灰窯は幾つ位あつたか今は記憶もないが今から思えば誠に微々たるものであつたに違いない。

古老の話によると一屯一円五六十銭であつたとか、小供が無理を云いゴネルと石灰工場えやる、と云えば直ると云はれた程石灰工場は喜ばれない事業であつたとか。その事業に図らずも晩年になつてからたづさわると云ふのも因縁と云ふものか。そんな香しくもない事業であつた時代もあつたが考えて見ると石灰こそ現今の文化を齎らすには欠くことの出来ない重要な原材料であつたのである。

鉱物の精錬に、製鉄に、建材に、セメントに、肥料に、ソーダに、カーバイドにその他幾多の化学工業の原材料として、又 CaC_2 から C_2H_2 となりこのものを基とした合成化学の発達は遂に石からゴム、繊維、パイプや窯業品に代る幾種のもの、或は鉄鋼に代るもの、その他次から次へと新らしい用途が発明せられて工業用に又日用雑貨に偉大な存在となり、之亦今日の文化になくてならぬ材料となつて吾人の生活を潤ほして呉れる。と思ふと何となく肩身の広い思いがする。

化学の力こそ実に尊いものである。昨今の経済市場を賑はしている成長株とやらも化学の力を買つたもの、その内でも合成化学工業が花形である。幸にも吾邦はこの将来性のある石灰には最も恵まれている。石灰の活用こそ文化を高め国を富ます源泉であると云える。石灰業界は今は余り恵まれていないが将来は恵まれた産業とならねばならぬ。又恵まれた産業に育成せられた時こそ吾邦の富む時であらう。

五十年の回顧

亀啓三郎

十年一昔と言ひますが、明治四十一年蔵前の学窓を出て五昔で五十年となりますが、当時学友は日本人は深尾謙造、田中藤作、大野一造、高橋清吉、松波菊次郎、上野継治、中野篁之助、亀啓三郎の八名で外人はマニラ人ホーセ、一人、印度人グプタ一人、友那人陳張浩一人、シャム人(名不明)一人の十二人であつたが、外人の生死は不明であるが日本人では今は大野一造君と小生の二人となつてしまつた。甚だ心細いことです。

大野君は今の刈谷市に於て県会、市会、国会等の政治方面に活躍をせられ、今尚此の活躍を続けて居られ、先日の手紙では喜の字の祝ひを迎えらるるとのこと、奥様も古稀の祝ひを迎へるとの喜ばしい便りでありました。小生は七十有参を迎えることとなりましたが、此の五十年の間何の業績も無く唯年を重ねてしまつたので誠に汗顔の至りであります。

私が在学当時を想い出せば、私は家が東京渋谷にあつたので諸君の様に下宿することなく、毎日渋谷から早朝割引電車で通学したのである。家は丁度今の日赤病院のある第二御料地の宮内省所有の土地に居たので、広尾橋で乗車して青山一丁目で乗り換え、須田町廻りの両国行に乗つて浅草橋で又乗り換えて学校前で下車したものです。之れを三年間繰り返したものです。蔵前情緒の漂ふ学校附近の風物も懐かしいものの一つだ。悠々と流れる隅田川の水面に浮いた油に春の太陽が五彩を漂わす。ポンポン蒸気船が通ふ。曳船が行く。鷗の群れが飛ぶ河の景色など眺めながら青春を語り合う学生の群、日本一の撰りすぐつた学生と云ふ自他共に相許す「蔵前」の誇りが彼等の面上に輝いて居た。

私が在学当時の校歌は

「堤の桜名に流れたる隅田の川の西の岸」を唄つた頃は校長は手嶋精一先生で窯業科長は平野耕輔先生であつた。一年生でも午前中は学科の授業で午後は化学分析や窯業工場で実習であつた。実習工場には滝田岩造先生、大谷謙一先生で外に師範職工が居て陶土の配合は先生に教はり、陶土を練ることや手轆轤、機械ロクロで成形することは職工に教はつた。「ヒネリ」ものや鋳込みものは板谷先生に教はつた。陶画は中田雲輝先生に教はつたものである。

二年生、三年生となるに従つて実習も実際化して又専門的となつて陶磁器、硝子、セメント、煉瓦と各人の欲する事をする様になつて、時には夜業もして窯を焚くこともあつた。

五月二十六日の開校記念日は東都の呼び物で殊に各科のバザー、流石に帝都の名物の一つに数へられた丈あつて子女が満艦飾で押すな〳〵とやつてきたものだ。応化の香水や紡織のセル地なども人気があつた。窯業ではマジョリカ焼、純白の旭焼などは飛ぶ様に売れたものであつた。兎に

角手嶋校長先生の方針として工場に行つた時職工を指導するに恥ずかしからぬ職工を養成する目的であるとのことで、四季を通じて午前八時始業午後四時終業で、彼の門衛の鳴らす独特の鐘が午前八時に鳴り終ると同時に以後入門する学生は遅刻届を出さなければならないのであつた。

私は明治四十一年七月に母校をおえて大日本麦酒株式会社吹田工場製壜係に入社して今日に至つたのですが、其の間札幌工場、博多工場、尼崎工場、保土ヶ谷工場、上海工場、東京本社を通じて四十八年間を麦酒会社の製壜作業に従事した。此の間製壜作業の変遷は人工吹より半手半機械、自働機械と窯は不連続式より連続式となり、石炭発生炉は重油炉となるなど変遷の甚しきには驚くの外はない。又他の窯業関係の作業も板硝子、セメント、陶磁器、煉瓦類に於ても其の変遷は在学当時とは全く変り驚くより外はない。

母校も大岡山に移転し、又大学となり校歌も其のたびに変り、今の大学校歌は三度目である。昭和四年四月一日東京工業大学に昇格したのである。永年の学校当事者の希望が達せられた。従つて大学としての内容も充実され、三十年後の今日に於ては学校当局としても卒業生も学生としても我国の誇りとする処である。殊に私達が在校時代は分子学時代であつたが、近来は原子学時代となつたので、今後は益々学界は勿論工業技術に於ても大進歩を来し、将来益々国家の為め活躍をする大人物の出ることを祝福する次第であります。

母校に関することは此の位で止めて置きませう。

卒業廿五年記念会のこと

蔵前四一会は関東に於ては昭和八年五月廿一日箱根環翠楼に於て参加し得る者は全国より会して祝賀会をした。参加者四十二名。関西に於ては昭和八年十一月十一日伊勢神宮参拝記念会をした。参加者二十九名であつた。この時全科を通じて家族と共に撮つた記念写真帖を作つた。巻頭には故手嶋校長の写真を加えあり、此時の幹事として尽力して呉れたのは機械出身の宮崎茂三氏であつた。写真帖には機械三二名、電機六名、紡織四名、応化七名、電化一名、窯業三名、図案二名、建築三名、染織四名会計六十二家族で、四一会の者全部では無かつた。現在五十年を迎えんとするに当つて、写真の内丁度三十二名生存、三十名は死亡して居る。二十五年間に半数を失つたことは誠に残念なことである。五十年の記念会は全国的に行ふことはお互に老年のこと故各地より走せ参ずると云ふわけに行かないから不可能のことと思ふ。全科を通じて現在社会に活躍中の人は六十一人許り居ります。

趣味断片

大正十四年頃より神社仏閣の集印をすることを楽み、伊勢大神宮より天孫降臨の地霧島神宮等神々の順により初め天神地祀八百万代の神に詣で、未だ五百位より集め得ないのである。一時考古学に凝つたので其の時始めた。

釣魚

釣りは川釣り殊に鮎、ハヤ、ヤマベ等は毎日曜日や毎夕やつたものであつたが、今は偶々海の釣りに行く位である。投網にて鮎やハヤを獲ることも随分やつた。投網は自分で何反も編んだものである。

写真

写真もこの頃の写真の性能の良い写真機が出来て、諸君達は良い美術的なものや天然色写真など、殊にスライドや映写機が安く入手出来るので上手であるが、私達の若い頃はコダツクが流行した時で、外にエルネマン等があつたが、レンズが暗いので暗箱以外では芸術写真は取れなかつた。今はとても老眼では若い人にはかなはない。

秋に鳴く虫

夏の終りより冬の初め頃まで鳴く虫、関東地方には何処にでも居る「カネタヽキ」「クサヒバリ」を近年は獲まへて楽んで居ます。「カネタヽキ」はついに十三たたきけりと云ふ名句もあり、支那では老人の娯楽として一寸角位の籠に飼つてお互に鳴き合せ会などをやつて居るのを見ました。

宮川様より何か書いて送れとのことでありましたが、小生至つて無骨者、文章も下手ですが以上の様なことを綴りました。

終りに会員各位の御健康と益々御活躍あらんことを祈ります。

同窓の皆様に

山内俊吉

今日は六月十日、国を出て丁度二ケ月目であります。只今ＰＰＡ機で太西洋上にあります。下界は曇天、機上は晴れです。

こうして米国の旅を終えて欧洲路に入りました。

忙しい米国の旅を終えてこうして機上で静かな気持になりますと思い出すのは先ず日本の皆様の御顔です。桜の盛りの工大での同窓会で大野会長の椅子の上からの御挨拶、同窓の皆様の本当に楽しそうな御顔、そして工業大学窯業の発展の姿を見て先輩に謝し我々の責任を感じた四月七日のあの日、又羽田で多数の方々の御見送りの御顔、宮川氏発声の山内教授万才の声など、まだ新

しく心の底に印しています。

しかしその間私は、Hawai, Sanfransisco, Los Angeles 等の見学、窯業協会大会の出席、ニューヨーク一円の旅等を終え米国の研究、生産現場の片鱗にふれ、その旺盛な研究、生産意欲に感心すると共に、日本人決して卑下する必要のないことなど色々感じながら二ケ月の旅を続けてしまつたわけです。本当に早いものです。

明朝はロンドンに着き米国とは違つた欧洲の空気にふれる段階になつたわけです。

丁度今、夕食の時間になりました。久々に洋酒の馳走にでもなつて米国での旅の疲れをやすめることに致しましょう。

本当に忙しい一人旅で皆さんに御便りすることも出来ませんので茲に会誌発行の便りが太田君からニューヨーク宛にあり、何か一筆せよとのことでしたのでこの機上の休息の一時を費して旅を元気で続けていることを一筆御報告申し上げ出発時の御礼並に旅行先からの御挨拶といたします。

遙かに皆様の御健闘を祈ります

六月十日 午後七時 太西洋上ＰＰＡ機上にて

ワグネル先生の墓参

御存知の方も多いと思うが独人ドクトル、ゴツト・フリード・ワグネル先生は明治元年に来朝され明治二十五年十一月八日に六十一才で多くの功績を残され東京で歿せられた方である。来朝後は大学南校、東校、東京開成学校、文部省製作学校及東京大学等で理化学、応用化学の講義をされ、本学では前身の東京職工学校時代の明治十七年に化学工芸部で陶磁器の講義をされたのが窯業科の始まりで次いで陶器玻璃工科を創設し数年後に窯業科となつた。

東京青山墓地内の外人墓地にあるワグネル博士の墓

職工学校は工業学校となり高等工業学校を経て昭和四年に現在の工業大学に昇格した。この間窯業学を修めた多くの卒業生は直接、間接に博士の指導をうけつぎ我が国窯業界の大をなした。博士は窯業学を始め染色、紡織其の他我が国工業界に残した功績は大きい。

本学内にも昭和十二年十一月に立派な碑が建てられていることは同窓の皆様は御承知の通りである。

博士は歿後東京の青山墓地内の外人墓地に埋葬され立派な墓所をかまえているが最近種々の事情で無縁のようになつていたのを本会会長大野政吉氏が窯業協会で御世話する理由があることを進言し協会理事会で之を認め都に手続きを完了したので、去る三月十九日の彼岸の日に協会役員と関係者が強雨中に墓参し博士の生前の御功績に感謝し、次いで旭硝子常務倉田氏の御厚意で同社麻布寮で博士を語る会を設けた。窯業協会の森谷会長を始め大野、中村、山内前会長及び倉田、岡本、北村、茂木、後藤各理事と藤岡、高井、宮川並びに協会事務局から薄田、入内島の諸氏が参加された。（宮川記）

熊沢治郎吉先生頌徳像徐幕式

多治見工業高等学校校庭の熊沢治郎吉先生の胸像

熊沢先生は明治三十年に本学の前身東京高等工業学校窯業科を卒業され郷土の陶業発展に尽された方で大正六年に東京工業試験所第三部長に就任と同時に窯業科の講師として十五年余に亘り多くの子弟を教育された。先般郷里の陶業関係の方々が先生の御功績を永く伝える為頌徳像建設を計画され（日展参事雨宮治郎氏製作）之が完成したので去る六月十日午前十時から、多

治見工業高等学校に於て、除幕式が行われた。連日梅雨模様であつたが、当日は幸に快晴に恵まれ、総べて順調に進行した。

熊沢先生始め御家族六名御出席、武藤岐阜県知事外県経済部長、市長、陶試場長、多工高校長、井深前校長、工業組合、加工組合、原料組合、等々の組合長役職員、先生恩顧の人々、多工高同窓会会員等百六十余名参列頌徳会々長、副会長より、建碑趣旨、経過報告あり、知事を始め各代表者交々、先生の多年学校教育、並に業界に尽力された功績を讃え、令孫田中せい子嬢(八才)に依つて幕は落された。

式後多工高講堂に於て祝賀会開催、盛会裡に二時頃開散した。

(小島 鯛三記)

近藤清治先生の十七回忌墓参

昭和31年6月24日，故近藤清治先生の17回忌　多磨墓地墓前にて，詣でるは長男実氏

昭和十五年六月二十五日当時の窯業学科主住であられた近藤先生が急逝され御家族はもとより学内、同窓諸代の驚きと悲しみは一方でなく窯業界の為にもまことに惜まれたが、あれから早十七年を迎えたので六月二十四日(日)に先生が安らかに眠る多摩墓地の松の家に奥様、実様(日本セメント研究所御勤務)他御遺族の方々と先生の旧友黒田泰造、大野政吉両氏及学内から山内先生奥様と河島、森谷、吉田、素木、毛利、太田の諸先生及宮川が落合い十一時頃先生の御墓前に読経、十七回忌の法養が営まれ、一同順次礼拝して在りし日の温良な先生を追憶し御冥福を御祈りした。

奥様始め御族の御健祥と御多幸を御祈りしつつ御わかれした。

(宮川記)

第二回窯業卒業五十年会記

昨年卒業五十年の同志相謀り、その前後の卒業生と合同で会合を催すことになり発会したことは当時の本誌に登載されたが、これを年々開催する約束によりて本年その第二回を開く、五月二十五日旭硝子株式会社倉田常務殿(同窓)の御厚意により同社麻布寮で行う。薄暮折柄の細雨霏々として寮庭の新緑を霑し、電光これに映えて点彩する初夏の清景を眺めつつ一同着座、改まつた挨拶もなく同社の厚意によりて運び出される酒肴にメートルをあげ懇話、歓談、雑談、和気靄々の内に数刻を過ごし次回を期して盛会裏に開散す。

(高井記)

出席者

笹井熊之助(五二年生)、藤岡幸二(五一年生)、高井三郎(五一年生)、大野政吉(五〇年生)、堅田欽次(四九年生)、亀啓三郎(四八年生)、倉田元治(右社常務)、河嶋千尋(母科教授)、森谷太郎(母科教授)

故奥田誠一先生追悼会

元国立博物館嘱託で本学の窯業で陶磁史の講義をしておられた奥田先生が昨年十月二十七日に御他界されたことは本誌第二号記載山内教授の「奥田先生を悼む」で御承知の通りですが、去る六月十六日(土) 午後一時から博物館の陶磁器関係の方々が計画され同館内の応挙館で御遺族の皆様と先生の知友や御指導をうけた方々数十名が集り追悼会が催された。当日開会前後には六窓園と九条館で御茶席が設けられた。応挙館内には先生と特にゆかりの深い名陶十数点と先生筆の陶画幅が飾られ参会者の自をひいた。午後二時過、先生の御写真を前に黙禱を捧げ御冥福をお祈りした後、旧友や御弟子格の方々の追憶談があり御遺族の謝辞で一応会を閉じたがこの間、列べられた名陶の観賞や先生の思出話が各所で交わされ四時過散会した。

(宮川記)

窯業同窓会定時総会と講演会及び懇親会

昭和三十一年四月七日(土)午後一時半頃から総会と講演会を本学第一会議室で開いた。次で五時過から学生大食堂で懇親会が開かれた。学内の桜は約七分咲で見頃であつた。

総会

(進行係　宮川愛太郎)

一、会長挨拶

大野会長は挨拶中で会誌の発行と十二月初旬に名簿発行其他本会事業に就て述べ一層の御協力を御願いした。尚本年から卒業五十年生の方々に記念品を贈ることになり本席では卒業五十年以上の九名の方に贈呈すること、本会副会長江副孫右衛門氏が藍授褒賞を授与されたこと、同窓野口長次、茂木今朝吉両氏が先般本学より工学博士の学位を授与されたことに対し御祝詞を述べ、更に来る十日に羽田空港を出発して欧米視察の旅にたたれる本学教授山内俊吉氏の長途御無事で帰朝される様御祈りする旨などが述べられた。

一、会務報告　常任幹事　田賀井秀夫

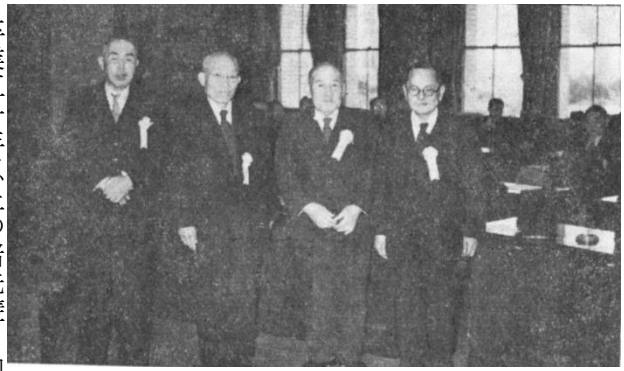
別記会務の報告をして御承認を得た。

一、役員選挙

大野会長より役員の任期満了に付選挙したいが議長を選出して頂きたい旨述べる。会長指名の声かかり一同異議ないので会長より森谷太郎氏を指名した。森谷議長から先づ正副会長選挙の方法を図つたのに対し若林滋氏より御迷惑乍ら留任して頂きたい発言あり一同賛成したので正副会長は留任と決定した旨宜し議長を大野会長と代る。会長より再任の挨拶があつた後幹事の選挙方法に就て図つた所会長一任の発言多く一同賛成したので氏名は学内幹事と相談して決定し会誌第三号で発表する旨述べ一同諒承して役員選挙を終る。

一、卒業五十年生に記念品贈呈

大野会長は卒業五十年生の為に江副副会長が本会を代表して本日の出席者渡辺明氏、笹井熊之助氏、髙井三郎氏、大野政吉氏の順に記念品(目録)を贈呈し御欠席の熊沢、井深、加藤、金島、藤岡五氏の分は一括して大野氏が授けられた(記念品は陶芸家辻晋六作花瓶、二頁 写真参照)



卒業五十年以上の諸先輩　向つて右より髙井三郎、笹井熊之助、渡辺明、大野政吉の諸氏

特別講演会

午後三時頃から左記の有益な御講演があり一同得る所多かつた。

講演中の藤岡由夫氏と遠藤敏夫氏

原子力の世界状勢に就て
原子力委員会委員　藤岡由夫氏

米国雑観　旭硝子株式会社　遠藤敏夫氏

以上で第一会議室での会を終り三々五々語り合い乍ら地階の懇親会場へ移動したが、三階や屋上から見る桜花は温室方面の高地まで三段に盛り上つて見事な景色である。大野会長も吉野山の千本桜の様だとほめていられた。

懇　親　会

午後五時半頃から本学地階の学生大食堂で行われた。本夕は欧米視察の旅に出られる山内教授

の壮行会をも兼ねた為か御出席は百十七名の多きに達した。大野会長より山内教授壮行の辞をおり込んだ挨拶があつた後ビールで乾杯し各テーブルで老若同窓が歓談するさまは如何にも楽しそうであつた。やがて別記御寄贈の景品を前に恒例の福引に一層興を添えて歓をつくし七時過盛会裡に会を閉ぢた。

窯業同窓会懇親会席上における寄せ書き

懇親会席上における大野会長の挨拶

話に花が咲く懇親会の一コマ

収支決算報告

自　昭和三〇年四月一日
至　昭和三一年三月三〇日

収入の部　総額　九三、九〇七円

内訳　前年度繰込金　九、五四一円
予金利子　四六六円
寄付金(七〇名)　三九、九〇〇円
懇親会々費(五〇〇×八八名)　四四、〇〇〇円

支出の部　総額　九三、三九五円

内訳　通信費　一四、四三〇円
懇親会費　四五、六九三円
幹事会費　六、三〇〇円
山内、河嶋両教授勤続二五年記念品代　二、〇〇〇円
同窓会誌第二号印刷及雑費　二一、二八八円
総会、懇親会(昭和三一年度)通知用印刷費　三、〇〇〇円
その他(写真代、謝礼)　六八四円

差引残高　五一二円

以上の通り報告します。

会計幹事

役員改選

四月七日の総会で改選の結果左の通り選出された。常任幹事は学内幹事の互選で定めた。

会長　大野政吉
副会長　江副孫右衛門　浮洲武彦　久保季吉
山内俊吉　倉田元治
幹事
青木俊郎、船木長造(大二)　佐藤保雄、大塚喜蔵(大三)　米谷忠次郎、坪内健次(大四)　木村一男、

上山節(大五)　赤塚幹也、木船要太郎(大六)　田山幹太郎、村瀬六郎(大七)　杉浦左太夫、藤井達人(大八)　上田滋穂、嘉悦新(大九)　五十鈴隆吉、山田精吾(大一〇)　川村新太郎、市塚年(大一一)　馬渡豪、神谷収太郎(大一二)　佐脇祥夫、　稲生謙次(大一三)　風間元一、山内卯吉(大一四)　鈴木錚吾、松尾義人(大一五)　伊奈辰次郎、小島豊之進(昭二)　肥田権平、水上義介(昭三)　遠藤隆雄、加藤正之(昭四)　伊藤幸人、保野福太郎(昭五)　安芸静一、真保義郎(昭六)　森谷太郎、和田貞次(昭七)　戸田文雄(昭八)　白石清悟、佐藤純夫(昭九)、檜山真平、若林明(昭一〇)　宇野達路、左右田孝男(昭一一)　岩切一良、池ノ上典(昭一二)　吉武素水、田賀井秀夫(昭一三)　大河原晋、長崎準一(昭一四)　素木洋一、堅田尚(昭一五)　長谷正義、船井長次(昭一六　三月)　加藤政良、中村八助(昭一六　一二月)　境野照雄、田中広吉、毛利純一(昭一七)　鷹木清、佐野和夫(昭一八)　近藤連一、寺岡三郎(昭一九)　大庭宏、加藤一男(昭二〇)　伊藤善高、鈴木弘茂、太田千里(昭二一)　雨宮正、遠藤幸雄、長谷川泰(昭二二)　有馬一喜、大槻彰一(昭二三)　田淵武、鴇崎清司(昭二四)　菊地央、川浪重年(昭二五)　丸山礼三(昭二六)　宇田川重和、宗宮重行(昭二七)　島村弘之、柳正光(昭二八)　新村年康、野尻忠彦(昭二八新)　塚本宏、原田賢(昭二九)、豊田萬三、青木進(昭三〇)、中島節治、岡田芳之(昭三一)　赤尾洋二、名取賢荘、熊倉正三(昭二三専)　小松原将、日笠泰行　(昭一六技)　大森道夫、林淳二(昭一七技)　居上英雄、西尾登志夫(昭一八技)　半谷哲男、水野逸郎(昭一九技)　大城敦之、竹内照男(昭二〇技)　小安英次、逸見英一(昭二一技)

学内教官(同窓を除く)

河島千尋、清浦雷作、山田久夫、川久保正一郎、吉田博、岩井津一、宮川愛太郎、村田順弘、斉藤進六、佐多敏之、青島清二

常任幹事

庶務幹事　稲生謙次、太田千里、村田順弘、

会計幹事　近藤連一、杉浦孝三、

名簿担当幹事　宮川愛太郎

窯業同窓会事業寄附金

(本誌第二号報告以後の分)

昭和三十一年三月二十一日より六月三十日迄

(略敬称順不同)

一〇〇〇〇円　江副孫右衛門

五〇〇〇円　伊奈製陶ＫＫ内伊奈長三郎外七名

三〇〇〇円　久保季吉、倉田元治

二〇〇〇円　石塚正信、井上英吉

一八〇〇円　五十年会出席者(笹井、高井、藤岡、大野、堅田、亀)

一〇〇〇円　真保義郎、吹田安兵衛、上山節、山静逸、鈴木保雄、加藤啓三郎、若林滋、米谷忠次郎、村上三五朗、浮洲武彦、原幾久、伊藤亮、遠藤幸雄、髙橋久雄、木船要太郎、北川信吉、松崎錠三、大野政吉、山内俊吉、河島千尋、森谷太郎

七〇〇円　佐藤実

五〇〇円　水地満穂、時枝定太郎、杉下正次郎、美崎敬之、尾関稲、越前谷民雄、倉田貢、小出一成、中根俊雄、井深捨吉、大塚喜蔵、茂木今朝吉、松本昌蔵、松木勝喜、永楽秀光、田中博一、福井哲、池ノ上典、水野茂樹、田上嘉秋、堅田欽次、若林明、髙井三郎、西田一雄、宇野達路、遠藤敏夫、岩切一良、尾野勇雄、江藤哲夫、山室忠臣、藤田庸助、田賀井秀夫、宮川愛太郎、素木洋一、稲生謙次、清浦雷作、亀啓三郎

四〇〇円　安芸静一、田山幹太郎、川村新太郎

三〇〇円　関口淳、木地一郎、風間元一、吉田格、秋山方宏、山下透二

二五〇円　藤岡了、巽昭夫

二〇〇円　荒井秀、中村周清、船井長治、中村厚、佐々木茂弌、森本孝治、長谷川保和、向井敬一、菊地央、伊藤豊成、中村満雄、塩田政利、管沼武彦、島珪次、中村能人、日笠泰行、御代健次郎、川畑健雄、村田順弘、鈴木弘茂、近藤連一、境野照雄、大阿原晋、佐多敏之、毛利純一、川久保正一郎、長谷川泰一

一〇〇円　谷沢喜信、日野新也、山内祐次、森元邦、浜野健也、伏野勅明、井上昭、山本博孝、鷹木清、石毛健二郎、上原巨海、岩瀬滋、宗宮重行、桑山則彦、大牟礼勝、赤尾洋二、伊藤善高、新村年康、古丸勇

懇親会福引景品寄贈者芳名(到着順)

一、インベ陶漆器小皿　二〇個　九州耐火煉瓦、長崎勧様

一、硝子アイスプレート　二四個　岩城硝子(株)様

一、メヌマポマード　一二個　名取硝子、名取賢荘様

一、ウテナクリーム　六個　同
一、硝子コツプ　一二〇個　石塚硝子、石塚正信様
一、磁器大型灰落し　五個　東洋陶器、江副孫右衛門様
一、前菜碗　六個　辻晋六様
一、平底蒸発皿　二一個　日本化学陶業、保野、梅田様
一、柱鏡　二〇個　旭硝子、倉田元治様
一、殺虫剤　二〇個　同
一、螢光灯スタンド　一基　昌光硝子、中村能一様
一、電球　二〇個　日本電子硝子、村上三五朗様
一、酒器(徳利一、盃三)　一〇組　島岡達三様
一、角形灰落し　五個　同
一、グラスター(硝子みがき)　三六個　日本磨料工業(株)様
一、ソーセイジ　五〇本　笹沼宗一郎様
一、ホーローボール　三個　角田顔保様
一、硝子灰皿　二〇個　佐々木硝子、田端精一様
一、磁器灰皿　五個　大食陶園、水地、安芸様
一、コーヒーセット半打入　四組　日本陶器(株)様
一、輻射電熱器　一個　田山幹太郎様
一、硝子灰皿　一二個　各務クリスタル、各務鉱三様
一、硝子大皿　五枚　同
一、硝子灰皿　一〇個　升水政幸様

ビール　四打　日本硝子(株)様（山田精吾様）
ビール　二打　大野政吉様

尚景品代として御寄贈分は事業寄附金に繰入れました故御了承願います。

名簿発行に就ての御願い

宮川愛太郎

本学は相当以前から科の制度を廃して応用化学系、応用物理系を主体とし其他建築系、理学系、経営系、人文科学系、体育系に改組された為などの関係から旧科の卒業同窓会活動は次第に低下し卒業生の横の連絡もとりにくい様になつたが、窯業同窓会は蔵前時代から続き以前は在京同窓の集りを主体にして来たのを昭和二十二年に全国的の同窓会に改組され全会員の名簿も同年十月に第一回を発行次で昭和二十四年、二十六年、二十七年、二十九年と順次内容を改め乍ら発行し本年も十一月現在で発行したいと存じます。

同じ学窓で然も窯業と云う専門の学業を終えられて夫々の業界、学界等に御活躍の先輩であり後輩である皆様が常に連絡して教え、教えられることは窯業界をよりよくする為に極めて大きな力となります。本会の名簿がその仲人をしてくれることを信じ、喜んで名簿発行を担当させて頂いております。就ては御住所、勤務先其他御移動がありましたら是非御知らせ願いたいと存じます。

学内だより

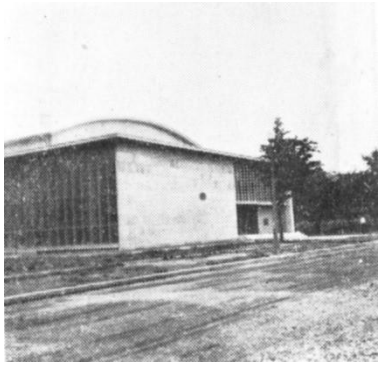
○ 山内教授欧米視察旅行に出発

A・M生

本会副会長山内俊吉教授は米国からヨーロッパ方面の窯業視察の為去る四月十日午後十時頃百数十名の見送りをうけ羽田空港を出発された、長途御無事で御帰朝を御祈りする。

○ 新講堂と体育館

本館に向つて右側のスロープであつた所へ新講堂が又東急線北側へ体育館が夫々本学創立七十年記念寄附金で出来上り目下内装工事中である。



東京工業大学新講堂

○ 正門

従来本学の正門は板張の貧弱なものであつたが先般正門前理髪店(本学敷地)が立退かないので道路から後退してコンクリート造りの堂々たる門が出来上つた。

○ 学長の選挙

現内田学長が任期満了の為先般学長候補者選考委員会(委員九名)が組織され第一次投票に

次で七月四日の教授総会では討論に終つた様子で五日に持越され白熱した討論後最後に海老原敬吉、山田良之助、茅誠司、内田俊一の四氏を対照に慎重に投票が行われ午後十一時頃に次期学長として現学長の内田俊一氏が再選出された。

○ 母校の創立七十五周年記念全学祭

本学の前身東京職工学校が明治十四年五月二十六日に創立してから今年は七十五周年に相当するので例年のように全学祭が催され、二十六、七の両日に学内を開放、各研究室の展示と実演及び映画、演劇、音楽、謡曲、講演、運動其の他、種々の催しがあつた。

窯友会では例年の様に十番講義室を展示会場とし窯業関係の陳列をしたが今年はプラスチックをガラス繊維で強化した製品に重点がおかれ、ボート、スクーター、屋根板、マツト等と板の強度試験やガラスの上絵焼付実演などが喜ばれたようだ。工場では例によつて蔵前時代からの窯業名物楽焼が実費以下の領布で人気を奪つた。又四番講義室では十六ミリ映画のセメント、硝子、宝石、キヤノンの各々出来る迄と浜田庄司陶房、アメリカ国立美術館などが二日間に亘つて人気をよんだ。

創立記念祭も蔵前時代と異なり科がない今日では窯業関係学生四年生が八名と四年になつたら無機材料化学を志望する約八名の三年生だけであるから学生は大変な苦労をする。それに研究室単位であるから全教官が協力参加不可能で名は全学祭でも歯の抜けた様な形になることは止むを得ないが物足らない感がある。

○ 窯友会に就て

窯友会は科のある時代に窯業科の職員と学生で組織された会で心身を練り親睦を厚くするのが目的で新入生の観迎会及卒業生の卒論発表会及送別会や雑誌会ハイキング、野球其他の催しをしたが特に昭和七年(学部第一回卒業の年)には旧職員や卒業生の一部も会員に加え「窯友」を創刊(活版刷六十二頁)昭和九年には第二号(謄写版刷百四十頁) を出すなど大いに活躍したものである。科の廃止後は四年になつて卒論研究にくる学生が主体の為活発な行事は出来なくなつた。現在窯友会の主なる行事は創立記念の全学祭参加である。科のない現在では夫々の会名を使用している。例えば白星会(機械工学)電工会(電気工学)応化会(有機材料化学)電化会(電気化学)藍友会(有機合成化学)綾友会(繊維工学)冬夏会(建築学)金工会(金属工学)理化会(化学)数物会(物理、数学)経友会(経営工学)などがそれである。その他の行事は卒業生の卒論発表会と送別会で職員対学生の野球試合其他も時々行つている。尚学生の工場見学なども行うことがあるので其節は宜しく御願い申し上げます。現在卒論研究中の学生は尾島、涌井、大熊、木村、小野、古志野、八木、西、石原の九君で本年度の職員幹事は大河原、毛利、宇田川の三氏である。

○ 本年三月卒業生の卒業論文

金属シリコン磁器について　岡田晃一(素木)
窯業品の物理的性質、特に熱伝導率の測定
岡田芳之(河島)
セラミツクコーチングの急冷熱抵抗性と接着境界層に於ける微構造の関係について
中島一浩(河島)
セメントの粉末度の強度に及ぼす影響
中島節治(山内)
高硫酸スラグセメントの硬化後の劣化について
長東直文(山内)
軽焼マグネシアのセメントの性質に及ぼす影響
中村敦(山内)
炭化珪素耐火煉瓦の基礎的研究
西尾嘉則(山内)
銅赤ガラスの発色について
花岡則和(森谷)

○ 窯行会に就て

本学は御承知の様に相当以前から科を廃して専任講師以上の研究室が独立している為横の連絡が充分でないので昨年七月に窯業関係の常勤職員約四十名と各研究室の研究生其他約二十名で旅行会を組織した。窯行会と称んでいる。目的は会員相互の親睦を図り、健全な心身を増進することにある。会費は本俸の約一%を毎月納める。第一回は 昨年七月二日に箱根強羅の静雲荘に一泊して清遊した。参加三十四名、第二回は同十二月五日に鳩バスで都内見物をやつた。五時半頃工大を出発浅草観音、吉原、蔵前どじょうやで夜食、日劇、フロリダ等をまわる。参加二十七名、第三回は今年七月八日に日光へ行き一泊して各所を見物した。同行三十七名、宿舎は何れも文部省共済組合の保養所其他指定宿を利用している。

○ 窯業助手懇談会

学内研究の主軸をなすものは助手であるが、科が廃され教官研究室が独立している今日では助手相互の連絡も不充分で共通した問題等に就ても全員が話し合う機会がなかつた。そこで本年一

月に窯業助手懇談会を組織し毎月一回開いて身近な問題に就て懇談を続けている。下に設立当時の趣意書を記しておく。

「戦後既に十年を閲し、窯業の研究も益々微に入り細を穿つ様になりました。工業大学の特色ある分野としての窯業の研究に携わる我々助手は一九五六年の新年に当つて内外共に多事多難であることを認識し又高水準の研究を続けていく為に新たな決意を以つて互に切磋琢磨していく所存であります。日本に於ける窯業の研究に於て常に先端をきる我々の自らもり上る研究に対する熱意と希望とを託してここに助手懇談会を設立し相互にその方針を研究討議してゆきたいと考えております。先生方を始め職員皆様の絶大な御指導、御鞭達を期待して我々の希望をより高いものにして頂きたく御願いする次第です」

尚現在のメンバーは伊藤、宇田川、大河原、太田、近藤、斉藤、境野、佐多、鈴木、杉浦、長谷川、宮川、村田、毛利の十四名である。

□ 本誌に原稿を御よせ下さい

第三号は卒業五十年前後の方々から思い出を語る原稿を沢山頂難う御座いました。第四号には大正、昭和時代の方々からクラスの動向、地方の話、随筆等を、最近卒業された方の職場に対する感想など御よせ下さる様御願いします。尚本誌に対する御希望御注文などありましたら御きかせ願います。（常任幹事）

昭和三十一年七月二十八日印刷
昭和三十一年八月一日発行
東京都目黒区大岡山一番地
東京工業大学窯業研究所内
編集兼発行人 宮川愛太郎
東京都目黒区大岡山一番地
東京工業大学窯業研究所内
発行所 窯業同窓会
振替東京一九六八五五番
東京都港区赤坂溜池五番地
印刷所 株式会社 技報堂
印刷者 大沼正吉